

丈人力のススメ

堀内正範著

「人生九〇年時代」をこう生きる

『丈人のススメ 日本型高齢社会「平和団塊」が国難を救う』(武田ランダムハウスジャパン刊・二〇一〇年刊)

堀内 正範 著

元『知恵蔵』編集長

◎目次

はじめに 「平和団塊」の人びととともに(未)

第一章 世相 「現役人生六五年」をすこして

第二章 家族 「ヒッペガシ娘」と「ツカエナイ親父」

第三章 モノ 途上国産中流品に囲まれて

第四章 居場所 四季と特性が息づく地域に

第五章 高齢期 エイジング・イン・プレイス

第六章 個人 住民・市民・国民として

第七章 国際 よろず佳き国際人として

第八章 新時代 「人生九〇年時代」をこう生きる

おわりに 「昭和丈人」のひとりとして(未)

〇一〇年刊)

「丈人」|| 「三世代多重型社会」を達成する「支える側」の高齢者。現役シニア。老人であり丈人である。

「丈人力」|| 丈人層が保持する生活力、生命力。大丈夫！の気概。人生の夢を深化・発展させる力。

「平和団塊」|| 平和の証としての「日本高齢社会」達成の中心になる戦後(一九四六〜五〇年)生まれ一〇〇万人の若き高齢者層。戦後ツ子。

〇〇万人の若き高齢者層。戦後ツ子。

25x17 2013.10.01 稿

第二章

家族「ヒツペガシ娘」と「ツカエナイ親父」

・「団塊余生派」か「古希現役派」か*・*

「団塊の世代」は「余生派」か

人生つてのは明日もわからない、ましてやその先は、という意識が「余生」を生む。そんな仲間が「余生派」をつくる。六五歳に達して高齢者の仲間入りをして、ヨボヨボジジババといわれるにはなお遠い「団塊の世代」の人びと。

だが、子どものころ戦後で貧しかったから、骨格を作っている素材が先輩たちよりよくないのを知っている。だから長寿には自信が持てない。とくに解消しない「有訴」があるわけでもない。戦後復興から高度成長期に競争と選択を常として、長く拘束されてきたしごとからやっとな開放された貴重な人生のひとつとき。

体力も気力も能力も一対一ではとてもかなわなかった先輩のしごとを引き継いで、五〇歳代を苦勞して老後の予定など立てようもなかった日々。とりあえずは今日を無事に迎えてすこす、明日がわからないのは自分だけじゃない。将来に目標がないからひっそりと暮らす。でも先行き不安だから貯蓄にだけはつとめた。

「団塊の世代」にはこういう内向的な人が多く、一人ひとりが自立というより孤立していて、団塊になんかならない人びとなのだという。

もちろんすべてではない。ここは典型あるいは点景として読んでほしい。

余分な交渉を閉ざして、儉約をして静かにすごしてきたから、夫婦ふたりがしごとを止めたときには、退職金を合わせて福沢諭吉幣で二五〇〇余枚が手元にあり、平均より少し多い程度だが、年金で暮らしていればいまま程度の暮らしは確保できるというから安心して暮らす。政府は消費税を増税して、年金財源は確保してくれるだろう。

まだこれから必要な子どもの結婚や急場の出費を確保して、夫婦で小旅行を楽しみレストランでちよいと贅沢もする。子どもと自分たちのこと以外にはあまり関心がない。この結果が「マイホーム主義」の現役人生での終着駅であることには気づいている。平均で平凡で平和ならそれでいい。

これまでの生活を変えるつもりはないこうした「余生」あるいは「老成」タイプの人びとが多数派をつくることになれば、「高齢社会」は大きくは変わらない。

「古希世代」は「現役派」か

一方に、やや年上の「古希」を迎えた七〇歳代の人びとに「現役派」がいる。

もちろんすべてではない。ここも典型あるいは点景として読んでほしい。

日また一日を外向的に暮らして、生涯行けるところまで頑張るといふ「現役」タイプ。成し遂げたい夢をもち、

そのためにアンチ・エイジング（若づくり）にも配慮する。ウォーキングはもちろん、合唱団で声を出し、ヒップホップで体をほぐし、料理もやる。貯蓄どころか、「ほどの赤字人生が男の人生だ」という先輩の生きざまにならない、それが人間を鍛えようと考えてきた。

「体力・運動能力調査」（文科省）では七〇歳代の男女とも右方上がりという。「知力」だって六五歳までが世界一（「国際成人力調査」OECD）なら七〇歳代ならなおのこと。有るだけのおカネは有るだけ必要な場にそそいで暮らしてきた。自分のためにも使うが、さまざまな活動資金としてその都度使ってきたからいつでも赤字。手元にあるワンコインがいちばん親しい。

福沢諭吉は「天八人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへり」といって、人生の道筋をつけてくれた先達として敬愛している。英語には「・better than・」、ラテン語には「HOMO NEC・・」があつて、福沢さんは史上の、内外のそういう立場の人びとと連なつて

いる偉人である。貴重な紙幣であるが、一枚とて長くはとどまってくれない。樋口一葉はいつもおカネに困っていたから、「葦一葉」に乗って長江を渡り少林寺で「面壁九年」の修行をしてお足なしになったという達磨にちなんで、奈津を一葉にしたという。ひとひらの一葉紙幣になった感想を聞きたいところである。そして東京・上野の科学博物館前に銅像が立つ野口英世博士。ノーベル賞をもらう前に、アフリカのガーナで黄熱病に罹って亡くなった。墓所はニューヨークにあつて、メリー夫人と仲良く眠っている。そのご苦勞を偲びつつ、この紙幣はよくやりとりする。

どれも貴重な紙幣であるが、どれも手元に留まらない。「長命派」というか、「生涯現役」タイプのの人にとつて実感はワンコインにある。

いま三〇〇万人に達した高齢者は、年齢にかかわらずなく上のふたつの類型のどちらかに近く暮らし、そのほかに残念だが、有訴から介護・医療などで「支えられて

いる高齢者」が二割強ほどいる。

「マイホーム中心主義」の果て

時代の動きは振り子に似ている。行き着くところまでいかなないと戻せないし、戻らない。

人為のすべては、だれかがどこかで関与している。進める人がいて進み、戻そうとする人がいて戻る。しかし慣性が働いていて行き着くところまでは行く。ああやっただ、こうしたいという少数者の当事者がいて、ああなつた、こうなつてほしいという多数の傍観者がいて、磁場をつくっているからである。

いま「家庭」と「国家」のあいだを行き来している時代の振り子は、「マイホーム中心の時代」が行き着いて、これからは「国家中心の時代」へと戻っていくといったら、多数の異論が出ることだろう。少数の同意の人のなかに、「先の戦争」の終わりに悲惨な経験をし、「平和」な時代を六八年過ごしてきて、「次の戦争」へと向かう潮

目の気配を感じている前章のTさんのような人がいることは確かである。

「国家中心の時代」の行き着く先が「戦争の惨禍」であり、「マイホーム中心の時代」の行き着く先が「平和の終焉」であるという体感が裏打ちしている意見である。

「国家中心の時代」から「企業中心の時代」へ、さらに「マイホーム中心の時代」へと三つの時代を体験してきた証人である大正生まれの人びと。そうした体験をもつ人びとが、いまも一貫して「マイホーム中心」の立場に理解を示しつつづけていることを見落としては、時代の先を読むことはできない。が、総体としての「マイホーム中心の時代」は限界に行き着いたのである。

それは個人（家計）が超一四〇〇兆円の資産をため込んだ一方で、国家（財政）が超一〇〇〇兆円の赤字を抱えてしまった経緯がひとつの証であろう。仔細には触れないが、財政悪化は戦後すぐの状況にまで達している。

「財政赤字」と「家計黒字」

国民意識の振り子がひとたび「一億玉碎」という「国家中心」の果てまで振れた末に終戦となった。

「終戦」といっても敗戦したのだから「戦後平和」は国民がみずからの力でつくりあげたものでも、勝ちとつたものでもない。敗戦のあと、企業の成長と成果がそのまま国の復興の基となり、企業の安定がそのまま家庭の安定につながると思えることができた人びとは、進んで「企業戦士」となったのだった。

文字どおり「平和の戦士」というにふさわしい男たちの生き方が、戦禍で荒れた国土の姿をまたたく間に変えていった。企業戦士にとって「企業」は戦場であり、「マイホーム」は休息の場であり、家族の幸せのよりどころとなった。だから銃後でも、戦後でも、多くの女性は一貫して「良妻賢母」でありつづけた。

「男女平等」の権利を得たものの、女性の社会的活躍は進まず、国際的レベルでは一〇〇位以下（ダボス会議「男

女格差報告」2013年度」という低さにある。ちなみに「賢妻良母」の中国は六九位である。

ここでは女性と高齢者の社会活動が、だからとくに高齢女性のありようがこの国の姿をかえるであろうことを確認して先にいきたい。

国家も企業もわが家もどれもが等しく重要なものだから、三つが同時に等しく扱われることがあってほしいのだが、実際にはむずかしい。

個人（家計）が超一四〇〇兆円の資産をため込み、国家（財政）が超一〇〇〇兆円の赤字を抱えてしまった民主主義国家。終戦後の国民意識の振り子が半世紀の間、個人の立場を重視する「民主主義」へと振れつづけた結果である。このままさらに振り子が「マイホーム中心主義」の果てまで振れつづけたときにどうなるか。

財政赤字によって国家が破たんし、三〇〇兆円ほどのためこんだものの企業も立ちいかなくなって、わが家だけが平穏でありうるものか。そこでまた記憶をたどって

「国家中心主義」の方向へと振り子はもどろうとする。国は多くを三〇〇〇万高齢者が保持して動かないでいる家計資産のひつぺがしに着手する。大きい数字ではわからないが、遠からず個人に実感されるものになる。

「核家族」の内部崩壊

いまはなお「マイホーム中心の時代」。

マイホーム、耳にすると心安まる、なんともいえず響きのいいことばである。これほどまでに生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。いま高齢者となっている人びとがそれぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語なのである。だから細部の意味合いは個人によって異なる。

ひよわなもの、よき（良き、好き、善き）ものを守る砦として、個人が大切に保っている「マイホーム」は、先行の「わが家」や「家庭」などとともに、それに負けない温もりを日本語として持つに至っている。そのぶん

「ホームレス」ということばがわびしさを伝えてくる。わが家において、「ホームレス」と遠くないわびしさを感じている戦後ツ子パパが増えているという。

戦後っ子だったパパとママは「マイホーム主義」とかかわれながらも、狭いマイホームに身を寄せ合って暮らし、必死に働いて、ふたりの子どもを育ててきたのだった。夫婦と子どもふたりの家庭が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。その後、職場までは遠くなっても、マイホーム・パパとママは、子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建てに引越した。そういう体験をもつ人びとは少なくないだろう。

人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得し、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。定年後まで住宅ローンを残しているご家庭も少なくないはず。マイホームの当主としての存在感を確認するため

に、じっくりとわが家の中を見直してほしい。

家族の希望をかなえることを優先して、そのぶんみずからの希望を抑えてきた結果、不相应な応接セットや家具といった家族共用品はあっても、みずから求めた専用品というのは少なくて、「モノと場」に表わされる当主の存在感が意外に希薄なのに気づくであろう。

・「ツカエナイ親」とはなんだ*・*

「ヒカラビてる人」

「ヨボヨボジジババ」

ここで夫婦と子ふたりの核家族、Fさんのマイホームを覗いてみよう。娘と息子が「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。イエローカード一枚ずつといった子どもを持つ「団塊シニア」であるFさん。

上の娘は短大を出てからフリーター暮らし。かせぎは

ほとんど衣装と旅行に消えている気配。下の息子はごく普通の大学をごく普通に卒業して、親のひいき目でもしつかりしてきたように見えるのだが、就職試験を受けて勤めはじめた有名輸送会社だったのに、短期でやめて家にいる。大学を出たのだからと自主性にまかせているが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをして過ごしている。時折り出かけて「職さがし」しているというものの、「ニート化」(NEET。働くつもりのない若年無業者)への気配もただよう。

娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者を、「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつていることがある。時には父親を「アノヒト」、面とむかって母親を「キミ、元氣？」と呼ぶなど、軽くあしらわれていると感ずることがたびたびある。

「この家はわたしが名義人なのだ」などというのも愚かしい。壁面に娘が貼った「のりか」(藤原紀香)のポスタ

ーほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁に存在感があるわけではない。

「ヒツペガシ娘」

「塩づけにできる資産などどこにもありはしないし、いまでさえわが家では子どもたち、とくに娘によって強奪に近い形でヒツペガシ(資産移譲)が行われている」

二二五〇万円余が高齢者の平均貯蓄額で、暮らし向きに心配ないが半数を超える？ 同居の娘をもつ団塊の世代のFさんは「信じられない」という。

女性が国の経済、社会の担い手になるのはいいのだが、どれほどの若い女性が自分の実力(かせぎ)で暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ(体型ギリギリのヘソ出し衣装)からいそいそとディオールのパーティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、際限なしの「女性化」に懸念をもっているのである。

「時代の花」として娘たちを擁護し、女性の活力に期待する立場からは、無条件に、両親や祖母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは両親からの家庭内ヒッパガシは当然と考えている。

「男女平等指数」（ダボス会議発表。二〇一二年）では一〇〇位以下という外国にくらべた低位置が話題になる。

経団連も同友会も女性の登用を「ダイバーシティ（多様性）の推進」としてすすめる。

女性に活躍の場をという「働く「なでしこ」大作戦」という国の政策が、昨年六月に、野田内閣の閣僚会議で決定された。小宮山大臣も乗り気の事業であった。

そして安倍総理までが、国連総会の演説でも女性重視を打ち出している。

女に生まれてよかった。笑顔で「おもてなし」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すではしやぎまわる女性で占められている。

「ツカエナイ親父」

人並みに応じられないと、「ツカエナイ親父！」としてあしらわれる。お前こそ「ツカエナイ娘」といいかえせないところがつらい。Fさんばかりか、うかうかしていると心優しい高齢者が居る場所もない、おカネもないなりかねないのである。新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに渋く輝いているはずだった高齢者が、居場所すらなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではIT音痴と軽視され、売れ筋ヤング製品の現場からはざされ、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などの「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後すぐごろの「ふりだし」へと戻って行くように思えてくる。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」

高齢者が暮らすのにふさわしいステージは家庭内から着実になくなりつつある。

テレビのチャンネル権はない。というより見るに値する番組がない。クルマは一台しかないので行く先が違えば使えない。というより子どものようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・JAFまですべて親持ちである。食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。自分では作りようがないから仕方がない。つまり「ステージレス」の状態にあるといえる。

聞けばだれもが同様で、家に居場所がなくなって「家庭内ホームレス」になる。といって屋外でも時間をすごせる居場所は、二四時間営業のファミレスかせいぜい公共図書館とパチンコ屋の休憩室くらい。「ステージレス」である原因は自分たちにあるとは判っていても、どうしたらいいのか解らない。このままで推移しては、高

齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かっていると感じられる社会は、招き寄せようもない。

マイホームに「MY」はあるか

「わが家のブランド品」

わが家の中を高齢者意識を立てて見直して見る。本だなの本が動いていない。耐久性のある家具は、どれも十年以上まえに購入したものばかり。前世紀のものだ。一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均やスーパーものが多くなった。シャツはユニクロ止まり。多くはアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物のなかには、先進国ブランド品もあって、ルイ・ヴィトン (LOUIS VUITTON バッグ) やプラダ (PRADA バッグ) やディオール (Dior 服装品) やシャネル (CHANEL 化粧品) などといったものはFさんにもわかる。スーパー品との

アンバランスさに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

Fさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ (OMEGA 終わりの意) の腕時計だけ。家族のたぬを優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずから生きることへの自負の欠落ではないか。

「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であつて、最も優遇されている仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていない。「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状に不満なのである。

「MY・・・がなぐマイホーム」

両親に対する不満との葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の潜在的ワル度をFさんはつかめていない。

一九八〇年ころから夕刊紙がふりまいた「悪を暴く記事」によって家庭にもちこまれた「荒廃菌」が、抗体的ない子どもたちに取り込まれて、いまや胸中をうようよ泳いでいるのだ。そこから発せられる配慮のないナマのことばに、他者の悪意が混じる。

当主として当然のこととしてきた家族への配慮が、「人生の第三期」にはいった自分自身を支える磁場の不在となつてしまっていることに、Fさんは危機感すら覚える。

マイホームに「MY・・・」がない。では「新宿ホームレス」とどこが違うというのか。たとえ不在であつても、

当主の存在感を同居人にきちつと示すような家庭内の拠点が必要なのだ。そのための専用スペースとモノの確保。

といて、夫婦と子ども二人で最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋をなんて余裕はない。子どもたちが親ばなれをせずにいるから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋である。

部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、獲得に失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点どころか「家庭内ホームレス」になってしまう。となると共用スペースであるリビング・ルームの一面。要はたとえ不在であっても当主の存在感をきちっと示せるようなコア（核）をつくることにある。

「当主不在の在」

「家庭内リストラ（高齢化）」

「家庭内リストラ（高齢化）」なのだから、無理してさせるのではなく、自らするものである。たとえ不在であっても、当主の存在感を示せるような「当主不在の在」としての「わたしのもの、MY・」の形成。いまリビング・ルームを見渡しても、何もかもがそうであるようである。そうでない。おおかたは家族共用品なのだ。

六〇歳すぎではじめる「家庭内リストラ」は、これまでそういう意図がなかったのだから、一からは始めるこ

とになる。際立って「わたしのモノ」といえるものなどないのが当たり前。

おおかたのマイホーム・パパは、常人であることを率直に認めて、わが高齢期人生を輝かせる「丈人モデル」型の能力を活かして、傍らにあって支えてくれる「高齢化用品」を意識して配置することしよう。

蓄えてきた知識や積んできた経験をさらに深化・発展させることに資する「わたしのモノ」を、いつでも利用できる状態に置いておく。後でみると述べるが、それらの知識や経験は、地域社会への参加にかかわるだけじゃない。「個人資産」になる。身近にあって「わたしのモノ」といった役割を担えればいいのだから、高価なブランド品である必要はない。日ごろから愛用しており、「わたしのモノ」という存在感があればいい。

これと決めた「わたしのモノ」を基点（コア）にして「家庭内リストラ」をすすめる。長い高齢期の住環境を整えようというのである。まずはひと昔前まではNO・

1の愛用品であり必需品であった机と文具類。いまやインターネットとEメールの時代だから、卓上パソコンと周辺機器に主役を奪われて久しく脇役に耐えてきた。これからは「第三期」の活動を支える高齢化用品の基点として、馴染んだ机と椅子は当主の「高齢者意識の据え置き場所」として確保して活かすことになる。

・「マイ・チェア」即座の効用*・*

「高齢化コア(核)用品」

デジタル化で実用性を失ったがシャッター音と手触りの愉悦には変わりがない高級カメラ、部品の揃わないオーディオといった愛用機器の類。楽器。それにあちらこちらに散在していたのを、全員集合！をかけてあつめた一二〇冊ほどの愛読書。

碁・将棋盤やゴルフ・釣り具セット。優れた手仕事に感じ入っていた碗・皿・硯といった日用骨董品。明かり、

時計、置物などのアンティーク(西洋古美術品)。日ごろ忘れがちな優美なものへの快さ呼びさましてくれる彫刻や絵画。造形や色彩が精細なものへむかう感覚を刺激してくれる貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・・・。

どれも当主としてはお気に入りの「わたしのモノ」であり「高齢化コア(核)用品」の候補だが、常時多くはいらぬ。その中から五〇七点を自分で納得して選り出して、活動の基点になる机と椅子のまわりや見える範囲に置き場所を決めればよいことだ。これと決めた愛用品を際立たせることで、家庭内に「高齢期のステージ」が立ち上がる。

静かに「家庭内リストラ」が動き出す。そのうちに同居人が「パパのもの」としてその存在に気づくだろう。

意外外に地球儀なんかがおもしろそうだ。東アジアの隅にある島国ではなく、太平洋リング(大洋弧)の一角にありながら、経済や文化の上で大きな貢献をして輝い

ている「優れた海洋国」であることを、宇宙飛行士の視点で納得することができる。アジア大陸の「小日本（シヤオ・リーベン）」であるとともに、広義の意味でのオセアニアの「海洋大国」としての多重性を活かすことができそう。

手にいれるのは困難な貴重種だそうだが、蝶の皇帝といわれる一頭の「テングアゲハ」なんかなら、華麗に舞う姿を思うだけで気分は晴れる。胡蝶に同化してひらひらと舞ったという壮年の荘子の「胡蝶の夢」は、味わって損はない。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上でのぬくもりはなまめかしい）でもいい。親ゆずりの高価な骨董品などがあれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」だから候補はいくらでもある。なければこれといったモノを探し出すこととなる。

「シニア・スペシャル(SSS)シート」

「マイ・チェア」

「団塊シニア」のひとり、Fさんには親ゆずりの骨董品など何も無い。リビング・ルームを見直した末に、小さな庭と室内の双方が見渡せる窓際に、高齢者特別席「SSSスリーエスシニア・スペシャル・シート」を据えることにした。会社でも窓際だったし家でも窓際でいいと、居心地を合わせることにして。そして文字盤が気に入っている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で入手したパピルスに画いた「狩猟図」と漢画像石の拓片「舞踏する熊」図を壁面の左右に飾ることにした。

Fさんの「SSS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢化時代を表現する「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。重量感より意匠センスより何よりも座り心地を優先する。いふなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」である。かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来

し方と行く末を半跏思惟する座を自選するのだから、「マイ・チェア」として大切に扱うことにしよう。

すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「マイ・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうなって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」というのは、マイホームを建てたときから気にしていた建築家の提言で、まことにその通りと思っても、ローンをいっばいに組み込んだFさんには、そこまでの「自己実現」の余裕はなかったし、家族思いの当主としてはそこまで自己主張をしなかった。いまその実現の時なのだ。

先長い高齢期を通じて愛着をこめて使い込むことよって座り心地を熟成させてゆく「マイ・チェア」。即座の効用としては家庭内に存在をアピールする磁場となる「高齢化コア（核）用品」として、格別の思いを込めて

それなりの費用を投じて得た「特別席ⅡSSシート」を、家中でもっとも居心地のよい場所に据えることになる。

一日のしごとを終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえる。「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。それでいい。それが「マイ・チェア」の即座の効用なのだ。どっしりと座って、からだの重みとともに来し方への充足感、行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたる。それなくして何の人生か。

心地よい「座る文化」

Fさんの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品には値切っても世紀の長があつて、実にさまざまに意匠をこらしていて、見るからによく、座り心地もよさそうだという。最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製のリクライニン

グ・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ「八面威风」の居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅があるようだ。

安らいで長い高齢期を過ごすための拠点が「マイ・チェア」なのだから、かつて恋する人を失った苦い思いを繰りかえさないために、これといったイスと出会ったら思い切つて投資（浪費）をする。後半生を考えはじめ「パレルライフ」の六〇歳還暦のころに記念に購入するのもいい。

＊・＊専用品をつなぐ暮らしの動線＊・＊

「超人生耐久品」

「三世代ステージ化」

家庭内の「わたしのモノ」である「高齢化コア（核用品）」として、「マイ・チェア」を推奨したが、高齢期の

自己目標に立ちむかう能力を支えてくれる愛用品でありさえすれば何でもいい。

とはいえ、傍らにおいて生涯にわたつて愛用していく「コア（核）用品」となれば、数年でモデルチェンジするような消耗品では役不足。だから日進月歩で変化する電化製品や車などは高価であっても評価が成り立ちづらい。といって「千年杉」を細工した違い棚のような鮮やかな年代主張はなくともいい。

どうだろう、ここでの「コア（核）用品」というのは、六〇歳から終生あるいはもう少し先まで考慮した「超人生耐久品」（遺産として残るほど）といったものとして、およそ三〇年利用というあたりをメドとしよう。「高齢化」は広く「長年化」「優良化」でもあつて、だから高齢者だけが利用するという狭い意味ではない。長年愛用する優れた日用品といったところ。

家の中を眺めてのとおりに、オープン・スペースに置かれているのは多くは家族共用の家具・調度品、つまり「三

代ミックス」型用品である。そのうちでも花器や草花の鉢植えや観葉植物や床の軸といった季節の気配を屋内に取り込む用品・用具は「家庭内高齢化」にはほどよい素材である。ソファなど高級家具はそろっていても、季節の気配が動かないリビング・ルームや客間なら「高齢化ゼロ！」としての評価を下しておこう。

家族構成にもよるが、「三世代同居」のお宅だと、青年、中年、高年の三世代がそれぞれ優先・専用する「三代ステージ化」が課題になる。これまでの家族共用品はそのままとし、それぞれに特化した生活空間を構成するにあたっては、同居人それぞれの今と将来の専用品と生活動線を考慮しよう。同居人から生活の自由を奪うものでないことが理解されないと先に進めないからだ。

「モノ同士のモノ語り」

「家庭内丈人度」

いろいろお持ちのことと思うが、季節（機会・気分）

に応じて差し替えるのが「季節小物」。わが家のリビングに四季折り折りの「モノ同士のモノ語り」がはじまることになる。後の項目でくわしく述べるが、こうしていくつかの「高齢化コア（核）用品」とそれをめぐるいくつもの「わたしのモノ」（高齢化専用品）を配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、当主としてのありようを伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や壁面飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」に少しずつ関心を強める。それでいい。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた活動家とはいえない。ここでは「丈人型の能力」を支えてくれる感性の優れた日用品、わが家に親しい友人を迎えいれるような興奮を与えてくれる「高齢化用品」を創り出してくれるにちがいない！さんのような各地各界の熟年技術者のみなさんに熱いエールを送って

から先にいくとしよう。

「高齢男子必厨」

「銘入り出刃一丁」

次にはキッチンの情景。

高齢の男性が「食」を知らないでいては、いつまでたっても女性との長寿の差（平均寿命は女性が八六・四、男性七九・九）の七歳は縮まらない。

男性が健康状態（からだ）を年齢より若くするアンチエイジングのために、高齢期に入ったら、志（こころざし）を立てて厨房に入り、調理（ふるまい）の腕を振るうことにしよう。

「厨在丈人」として、まずは日本橋・木屋や京都・有次あたりの包丁三丁（出刃・刺身・菜切）は吟味して入手する。「銘入り出刃一丁」は、脇において頼りになる「高齢化コア（核）用品」である。無銘包丁の奥方や卒業記念包丁の娘の前で、それだけで存在感がある。タイまで

はいかなくとも、中型のイナダやシマアジなんかを手ぎわよくおろして食卓に供する。

さらに「旬の食材」をみずから用意する。今夜の口樂であり生涯にわたる悦樂である食の道樂。味覚とともに調理もまたきわまりなく熟達しつづけていく「丈人型能力」なのだから、おおいに腕を振おうではないか。同居人が期待するような季節メニューがひとつ又ひとつ増えれば、口樂は倍になる。

次には食器。これは形や感触を楽しめる専用品となる。自作のものを含めて「これは。パパのもの」という食器が、食のシーンでの存在感を示す役目を担う。その際に、同居人のものとの調和に配慮すること、押しつけるような存在感は避けなければならない。品性のただよう柔和な存在感。費用対効果の高い逸品がいくらでもある。

「厨在丈人」によるキッチンの「高齢ステージ化」は、なごやかに緩やかに形成すべき愉快なテーマである。得意料理を得意がつてつくるところから入らず、食器の片

付けや用具の手入れや調味料の整理あたりから、さりげなくそれとなく構築していくことに秘訣がある。

「丈人資格自己認定」

こうして、いくつかの「高齢化コア(核)用品」を基点として、いくつもの「わたしのモノ」をつないだ暮らしの動線が太く見えてきて、同居人もその意味合いに納得してくれるようになれば、マイホーム・リストラは緒についたとっていい。そこで「丈人資格自己認定」ということになる。I O G (東大高齢社会総合研究機構)が検定をおこなう「高齢社会エキスパート」の合格認定も晴れがましいが、家庭内の「丈人資格自己認定」もあっていい。

「いまさら面倒やさかいに、わたの人生はその三世代ミックスとやらで結構や」という人もいるだろう。人それぞれの人生やさかいに、ご随意にどうぞ、といたいところだが、結論は試みてからにしてほしい。苦勞して構

えたマイホームで、高齢期を迎えた当主としての充足感が時の移ろいととも強まる体験は、思いのほか快いとなのだから。

「パパとママは落ち目、明日はボクラのもの」と早合点していた若い世代に、本来あるべき姿としての高齢世代の「第三期の人生」を認識させることになる。「家庭内リストラ」なくして「社会の高齢化」はありえない。

ではもう一度、親しい友人を迎え入れるような終生にわたって愛用できる「高齢化用品」を創り出してくれる各地各界の熟年技術者のみなさんにエールを送ってさらに先にいくとしよう。

近居より同居が未来型

「エンプティ・ネスト」

「二世帯型住宅」

ここでは「団塊の世代」をふくむ「還暦期」よりやや

高齢の「古希期」にある方の場合を見てみよう。

すでに哀樂をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」として想い見るほどのスペース（「エンプティ・ネスト」。空になった巢）を、そっとしておくことができているご家庭も多いことだろう。

多忙多用な中年期に家計をぎりぎりまで工面して借り入れをし、都市郊外に戸建住宅を購入して子どもを育て、子どもがそれぞれに自立した後は夫婦ふたりで暮らしているマイホームは、「二世代型住宅」と呼ぶことができる。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるだろうが、子育て期のいくつもの困難をなんとかクリアしてきた父と母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、子どもたちとくに娘にとってはひそかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇％が同居を望

んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇％ほどに。大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「TSUNAMI」がトップという時代に、場違いといった感じでベストテン入り（二〇〇〇年度の一位）したことがあったが、「孫」との同居の減少傾向はなお続いており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

「古希期」あたりの高齢者の「マイホーム家族」のありようは、ここから分かれる。「アワ・ホーム」（わが家の三世代同居型）と「マイン・ライフ」（ひとり暮らし型）とである。後者の場合には、夫を失ったあと（逆も）ひとり暮らしになる。

幸せ家族の「孫育つ」

ここでは本稿が将来の標準家族として想定する「三世代同居型」家族のありようを追ってみる。

孫はかぎりなくかわいい。傷みは目立つものの住み慣れた「二世代住宅」に暮らしている父と母は、子どもが

単立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、
わが家三代目を養育する場を用意することになる。

「近居」ができている場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。若い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出合いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

だれもがきちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっているけど、現状ではこのあたりが高齢者にとっては標準的しあわせ家族となっている。

「近居」がうまく機能しているみなさんのご家族のしあわせを祈りつつ、このところ減りつづけてきた「三世代同居住宅」の課題をみてみたい。三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「暮らしの知恵」が途切れてしま
うからだ。

いままさにその時期にある。「三世代同居」は仔細なわが家三代の「暮らしの知恵」を子孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。かつてのヨメ（嫁）の犠牲に成り立っていた標準住宅ではなく、三世代がそれぞれのプライバシー空間を保持しながら、同等の意識で暮らしをともにする家族住宅である。

「新エンゼルプラン」

「実家依存症」

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを待つより、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ベビー（孫）」がやってくる。

二五歳までの並みの出産期をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代に。これでは少子化に歯止めのかげようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どもをと覚悟はきめたものの、夫婦の不安定なしごとでは

養育・教育費は家計の重圧になるのは先方に見えている。

公立でも約一〇〇〇万円、私立だと約二二〇〇万円になるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。国をはじめ、夫婦ふたりによる子育てを「新エンゼル・プラン」以来の目標とし推奨している自治体や、若いカップルを対象にして子どものしつけを教えるしごとをしている専門職側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていないのである。

驚いたことには「次世代育成」の現場では「祖父母」という文言は公的文書のどこにも示されていない。これではわが家三代の暮らしの知恵は、祖父母の立場で子孫に伝えようがないのである。

それでも子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期

待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦がいる。

かつてシュウトメにわずらわされないよう専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避けて太一文字型の専業課長でありたい娘世代による「三世代同居」へのUターンである。ここは女系の母娘とするが、それでも三割強は十分に確保できる。

「三世代同居型住宅」

孫世代同居までを想定した「三世代同居型住宅」は、子どもの側からばかりでなく、新しい戸建て住居に住むという両親の側からの要請も少なくない。親世帯からは近居の解消、家屋の老朽化やバリアフリー化や大型住宅への願望、そしてエイジング・イン・プレイスなどが主な理由で、加えてメーカー側の総合住宅指向、さらに融資や税の優遇もある。親世代の支援を受けて「少子化」を解消し、先人から引き継いできた「暮らしの知恵」を次世代にしっかり伝えられるような「三世代同居型住宅」

が期待されることになる。期待ではなく実現されなければ意味がない。

住宅中心からいつしか道路、橋、ハコ物という大型公共事業に頼ってきた建設業界も、公共財メンテナンスへの関心ばかりでなく、地域住民の暮らしの基盤である住宅・街並み・まちづくり建設という基本に立ちかえる好機なのではないか。

地方都市周辺の近郊農家の建て替えなどでは、敷地内同居（近居）を多く見かけるが、「三世代同居型住宅」がもっと指向されている。「三世代同居型」という「新標準住宅」を各地に展開して、新たな地域開発の潮流を起すくらいでいい。国も「暮らしの知恵」を次世代に伝えられる「三世代同居型」住宅政策を掲げて、思い切った税制や資金の優遇をおこなう必要があるだろう。

現状では政策も税の優遇も融資も世論の支援も、そして高齢世代からの要請もケタが足りないのである。

*・*暮らしの知恵を子孫に伝える*・*

「長寿社会対応住宅」

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の娘家族の要望もあって、建て替えの負担を覚悟して「世帯同居」型の住居を建築することになっている。

メーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはない。各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っており、住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されている。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・などが実現されている。「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもある。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお

宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。そこで、Wさんは参加してみた。大手メーカーによる広域住宅地での建て替え住居だから外形も安定しており、年月を重ねて街並みに落ち着きを与えていることがわかる。かなり大ぶりのサクラが庭の隅にあつて、それを囲むようにL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

Wさんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかは高校生の娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあつて、「マスオさん」として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。

上下階の雰囲気違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。「三世代同居型住宅」として申し分ないが、それでも義

母の側の遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省）が出て二〇年近くになる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもっとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、まだ共用スペースのつくりつけがミドル（十ジユニア）主体に寄りがちになっている。「三世代型住宅」とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられる。

これではほんとうの高齢化対応住宅とはいえない。「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期をゆつたりと暮らす家ではない、とWさんも気づい

ている。

ここはわが妻であり子の母であり孫たちの祖母である高齡女性の出番である。孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての共有スペースはもちろん、「三世代のプライベート・スペース」を等しく織り込んだ住居を目標にして、メーカーの技術者と設計にはいつている。

「ファミリーライフ・サイクル」

三世代それぞれの暮らしにバランスがとれた「三世代同等同居型住宅」は、高齡者の側から計画を提案して主体的に構築せねばならない。ジュニア（孫）との接触スペースなどは、可能なかぎり祖父母の立場から提案すべきことである。高齡者が自在に暮らす住宅としての具体的な要望が足りないために、メーカーから高齡化対応に積極的な三世代同等同居用のモデル構造が引き出せないのである。

「三世代同等同居型住宅」は、三世代の暮らしの変化が構造に反映される「ファミリー・ライフ・サイクル」（家族変化の過程に応じられる）住宅である。いまの家族の一まわり先を考慮した構造として表現される。三世代がそれぞれ三〇年ほど先の姿とそこへ至るプロセスを想い描いてみる。もちろん「不在」の孫世代夫婦までを参加させ、みずからの「不在」の時も考慮して。

「世帯同居」型住宅は一〇〇年（センチュリー）、少なくとも六〇年保証とメーカー側は自信をもっていう。確かにいまの建築水準からいって耐用年限は五〇〜六〇年は優にある。

だから、およそ半世紀後に孫の家族が中心で暮らす家や家並みをつくっていることになる。傷んだ住宅を修理しながら住んでいる高齡世代からすれば、「近居」や「隠居型同居」ではなく、三世代が同等に暮らせる「三世代同等同居型住宅」が「新・日本型標準住宅」として指向され、「家庭内の高齡化」への試みとして、広く実現され

るようになれば、多くの高齢家族が知識も資力も注入して参加するだろう。それぞれの家族の態様や地域の特性に応じた改造を加えながら安定した造りの「わが家」と街並みが形成される。

ライフ・スタイルの異なる三世代が、それぞれ同等にプライベートな生活空間を持ち、お互いに工夫して「わが家」の暮らしの知恵を共有していくことになる。

「三世代同等同居型住宅」

「家族みんなで考えていろいろ解決することができますから」と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三世代がいくつもあるさまざまな場面での処理に期待をこめていう。「三世代同等同居型住宅」の実現をめざすことのできるW家はしあわせ家族である。すべてのご家庭にできるわけではない恵まれたケースである。

子育て期の女性が男子社員と伍して能力を十分に発揮できるように支援をする「三世代同等同居型住宅」は、企

業の側からも歓迎すべきものとなる。これまで六割におよぶ結婚時に途中退社するM字型就業を意識せずに、入社時から高齢まで真一文字にしごと集中できる人材として処遇できるからである。

そして何より孫世代にわが家の「暮らしの知恵」を暮らしの中で伝える「母娘同居」という母系のつながりがあり有効に活かすことになる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがある。

「うちのジージがね」といつて自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。国の骨格がもろくなってしまうのである。

同居しながら高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するために重要な「二つのステージ化」の一環なのである。